

2026年4月3日

## AI 需要で韓国3月輸出額は過去最高 (Asia Weekly)

～輸出の堅調さが生産を押し上げる展開が続いている～

経済調査部 主席エコノミスト 西濱 徹

(Tel: 050-5474-7495)

(経済指標の振り返り)

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
3/30(月)	(インド)2月鉱工業生産(前年比)	+5.2%	+4.2%	+5.1%
3/31(火)	(韓国)2月鉱工業生産(前年比)	▲2.2%	+6.0%	+6.8%
	(中国)3月製造業 PMI	50.4	50.1	49.0
	3月非製造業 PMI	50.1	--	49.5
4/1(水)	(韓国)3月輸出(前年比)	+48.3%	+44.9%	+28.7%
	3月輸入(前年比)	+13.2%	+18.0%	+7.5%
	(中国)3月 RatingDog 製造業 PMI	50.8	51.6	52.1
	(インドネシア)3月消費者物価(前年比)	+3.48%	+3.60%	+4.76%
	2月輸出(前年比)	+1.01%	+3.20%	+3.39%
4/2(木)	2月輸入(前年比)	+10.85%	+11.20%	+18.21%
	(韓国)3月消費者物価(前年比)	+2.2%	+2.4%	+2.0%
	(オーストラリア)2月輸出(前月比・季調済)	+4.9%	--	▲1.6%
	2月輸入(前月比・季調済)	▲3.2%	--	+1.1%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

## [韓国]～世界的な AI 関連需要の旺盛さが輸出を押し上げ、3月の輸出額は過去最高を更新している～

31日に発表された2月の鉱工業生産は前年同月比▲2.2%となり、前月(同+6.8%)から4ヶ月ぶりに前年を下回る伸びに転じた。ただし、前月比は+5.4%と前月(同▲2.4%)から2ヶ月ぶりの拡大に転じるとともに、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど底堅い動きが続いている。分野別では、公益関連の生産は下振れしているものの、建設業で生産が大きく上振れしているほか、鉱業、製造業などで生産が拡大しているうえ、サービス業においても生産が拡大しており、幅広い分野で堅調さがうかがえる。製造業では、木製品や縫製品といった軽工業関連のほか、自動車など輸送用機械、電気機械関連などで生産が下振れする動きがみられるものの、主力の輸出財である半導体など電子部品関連の生産は大きく上振れしていることが生産全体を押し上げており、外需の旺盛さが生産活動を下支えしている。

1日に発表された3月の輸出額は前年同月比+48.3%となり、前月(同+28.7%)から伸びが加

速している。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比も5ヶ月連続で拡大しており、単月ベースの輸出額は過去最高を更新している。今年は春節（旧正月）の時期が前年に比べて大きく後ずれした影響を考慮する必要があるものの、イラン情勢の緊迫化による悪影響が懸念されるなかでも輸出は旺盛な動きが続いている。財別では、世界的なAI（人工知能）ブームによる需要の旺盛さを反映して、半導体輸出が大幅に拡大しているほか、イラン情勢の緊迫化を受けた石油製品関連の輸出拡大の動きも輸出を押し上げる一方、自動車輸出の伸びは小幅にとどまるなどイラン情勢の悪影響が出る動きもみられた。国・地域別でも、最大の輸出相手である中国向けのほか、米国向け、欧州向けは軒並み高い伸びをみせる一方、中東向けは大幅に減少している。一方の輸入額は前年同月比+13.2%となり、前月（同+7.5%）から伸びが加速している。前月比も2ヶ月ぶりの拡大に転じていると試算されるほか、中期的な基調も拡大傾向で推移しており、輸出同様に堅調な動きが続いている。原油価格の上昇を反映して、原油や天然ガス関連の輸入額が押し上げられたことも影響している。結果、貿易収支は+257.37億ドルと前月（+153.76億ドル）から黒字幅が拡大して、過去最高を更新している。

2日に発表された3月の消費者物価は前年同月比+2.2%となり、前月（同+2.0%）から伸びが加速している。前月比も+0.34%と前月（同+0.31%）からわずかに上昇ペースが加速しており、生鮮品をはじめとする食料品価格が上昇しているほか、中東情勢の悪化に伴う原油価格の上昇を受けてエネルギー価格も上昇するなど、生活必需品を中心に物価上昇が進んでいることが影響している。一方、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+2.2%と前月（同+2.3%）からわずかに伸びが鈍化しているものの、2ヶ月連続で中銀目標（2%）を上回る伸びで推移している。前月比も+0.10%と前月（同+0.40%）から上昇ペースは鈍化しており、エネルギー価格の上昇を受けて輸送コストに押し上げ圧力がかかるとともに、金融市場での通貨ウォン安の進展が輸入物価を押し上げる動きも重なり、幅広く財価格が上昇している。その一方、サービス物価は対照的に鈍化しており、インフレ圧力を和らげることにつながっている。

図1 KR 鉱工業生産の推移

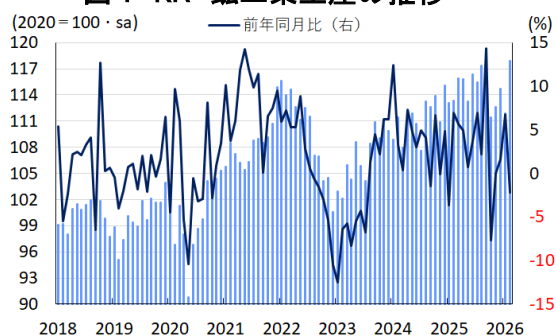


図2 KR 貿易動向の推移

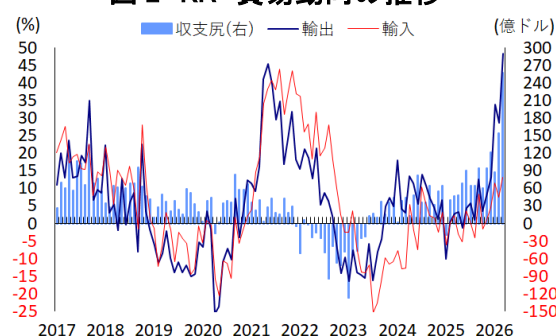
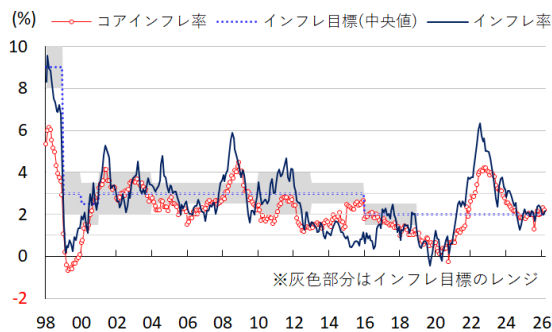


図3 KR インフレ率の推移

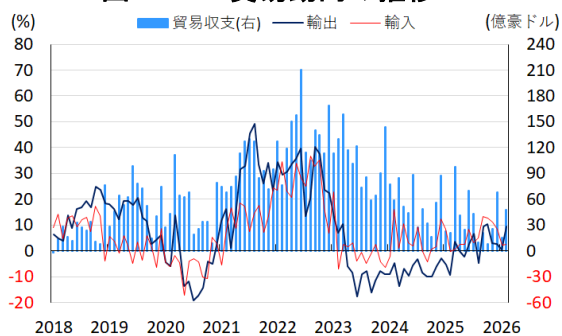


(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

**[オーストラリア]～鉱物資源を除く幅広い分野で輸出拡大が続く一方、輸入に頭打ちの兆しが出ている～**

2日に発表された2月の輸出額（季調済）は前月比+4.9%となり、前月（同▲1.6%）から2ヶ月ぶりの拡大に転じているうえ、中期的な基調も拡大傾向で推移しており、総じて堅調な動きが続いている。財別では、原油や天然ガスのほか、石炭や鉄鉱石など鉱物資源関連の輸出が下振れしている一方、機械製品関連や化学製品関連、食料品などの輸出が軒並み拡大しており、輸出全体を押し上げている。国・地域別でも、最大の輸出相手国である中国向けのほか、ASEANなどアジア新興国向け、日本向けが下振れしているものの、米国向けや欧州向けは堅調に推移しており、インド向けが旺盛な動きをみせていることも輸出を下支えしている。一方の輸入額は前月比▲3.2%となり、前月（同+1.1%）から2ヶ月ぶりの減少に転じている。前年同月比は+2.6%と前月（同+2.2%）から伸びが加速しているものの、中期的な基調は減少傾向にあるなど、勢いが鈍化しつつある。財別では、鉱物資源関連の輸入は拡大しているものの、石油製品関連の輸入は下振れしているほか、機械製品関連や化学製品関連、食料品など幅広い分野で輸入が減少している。結果、貿易収支は+41.47億豪ドルと前月（+15.80億豪ドル）から黒字幅が拡大している。

図4 AU 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

**[インドネシア]～前年のウラが出る形で3月のインフレは鈍化も、先行きは原油高の影響が懸念される～**

1日に発表された3月の消費者物価は前年同月比+3.48%となり、前月（同+4.76%）から伸びが鈍化して、3ヶ月ぶりに中銀目標（2.5±1%）の範囲内に収束している。昨年1月から2月にかけて実施された電力料金の引き下げの反動でインフレは上振れしたものの、その影響が一巡したためとみられる。前月比も+0.41%と前月（同+0.68%）から上昇ペースが鈍化しており、中東情勢

の緊迫化を受けたエネルギー価格の上昇が小幅にとどまるとともに、生鮮品をはじめとする食料品価格の上昇ペースが鈍化していることが影響している。食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率も前年同月比+2.52%と引き続き目標域内で推移しているうえ、前月（同+2.63%）から伸びが鈍化している。前月比も+0.13%と前月（同+0.42%）から上昇ペースは鈍化しており、一部の財価格に上昇圧力が強まる動きがみられるものの、サービス物価で軒並み上昇ペースが鈍化していることがインフレ圧力を後退させている。しかし、足元では石油備蓄の乏しさも影響して、エネルギー価格は上昇圧力が強まりつつあるため、インフレが高止まりする可能性は残る。

同日に発表された2月の輸出額は前年同月比+1.01%となり、前月（同+3.39%）から伸びが鈍化している。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は2ヶ月ぶりの拡大に転じているうえ、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど底堅い動きが続いている。財別では、天然ガスの輸出額は拡大したものの、製造業は横ばいのうえ、鉱物資源や農産品は下振れするなど、分野ごとにばらつきがみられる。一方の輸入額は前年同月比+10.85%となり、前月（同+18.21%）から伸びが鈍化している。前月比は2ヶ月ぶりの拡大に転じたと試算されるうえ、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど、輸出同様に底堅い動きが続いている。財別では、原油や天然ガス関連の輸入額は下振れしているものの、機械製品関連や電気機械関連のほか、宝飾品関連など幅広い分野で輸入額が拡大している。結果、貿易収支は+12.73億ドルと前月（+9.54億ドル）から黒字幅が拡大している。

図5 ID インフレ率の推移

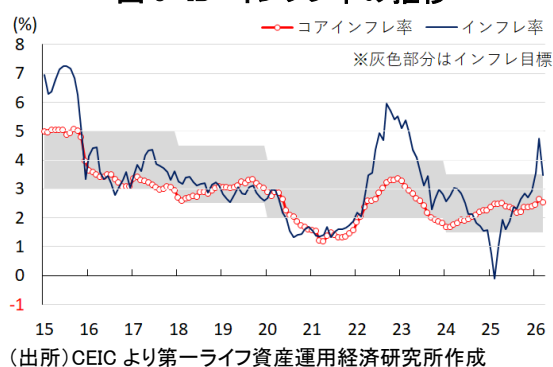
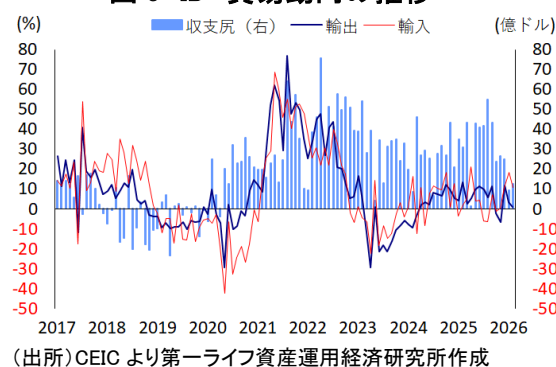


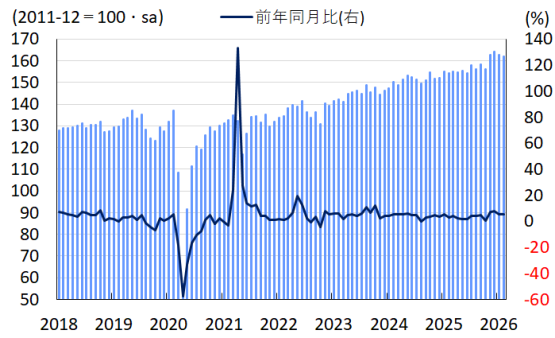
図6 ID 貿易動向の推移



**[インド]～前年比の伸びは堅調に推移しているものの、足元の生産は頭打ちの動きを強めている模様～**

30日に発表された2月の鉱工業生産は前年同月比+5.2%となり、前月（同+5.1%）から伸びがわずかに加速している。ただし、当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は2ヶ月連続で減少しており、中期的な基調も減少傾向に転じるなど鈍化の動きが強まっている。製造業の生産に底堅さがうかがえるものの、鉱業で生産が鈍化したほか、経済活動の動向に連動する発電量も下振れしている。製造業のなかでは、縫製品や皮革製品、紙製品といった軽工業関連で生産が拡大しているほか、医薬品関連や機械製品関連、自動車などの生産にも堅調な動きがみられる。一方、コンピュータ関連など電気機械関連のほか、家具などの耐久消費財や木製品、食料品など幅広い分野で生産に下押し圧力がかかるなど、業種ごとのばらつきが拡大している。種類別でも、資本財や中間財関連の生産は下支えされているものの、消費財関連の生産は総じて下振れする動きが確認されるなど、底入れの動きを強めてきた流れに一服感がみられる。

図7 IN 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

以 上